

少女小説は死なないー氷室冴子から現在まで

多くの人を魅了してきた少女小説は、時代の流れに応じて変遷を重ねてきました。各時代の読者と寄り添い、少女たちが小説に求めてきた「夢」のありようや「現実」との距離感は形を変えながら、いつの時代も読者にとっての「居場所」であり続けました。

60年代に支持を集めたジュニア小説が低迷した70年代後半、少女と感覚を共有するような若手作家が登場し、氷室冴子や新井素子等が新しい形の少女小説を切り開いていきました。80年代後半は、現代の学園を舞台にした少女一人称のラブコメが人気となり、多数のレーベルが創刊されるなど少女小説ブームが社会的にも注目を集めました。その一方で90年代に入ると人気ジャンルはファンタジーへと移り変わり、少年を主人公としたシリーズが増加し、さらにはボーイズラブも少女小説レーベルのなかで刊行されるようになるなど多様化が進みました。2000年以降は女性主人公の異世界ファンタジーが勢いを増し、また近年の少女小説は大人の女性が読者層の中心を占め、仕事をするヒロインや花嫁という設定、安心感のある甘い恋愛を描いた作品が人気となっています。

このように、少女小説の人気ジャンルは目まぐるしく移り変わり、そのなかでさまざまな作家や作品が登場しています。70年代から現在に至るまでの少女小説の変遷を、社会学、文化研究を専門とする嵯峨景子氏が豊富な図版資料とともに紹介します。コバルト文庫を中心に、ティーンズハートやビーンズ文庫など、各レーベルの動向や流行ジャンルの変動を時代背景と関連付けつつ考察していきます。

講師 嵯峨 景子（明治学院大学非常勤講師）

1979年札幌生まれ。専門は社会学、文化研究。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学。現在は明治学院大学非常勤講師、文化学園大学文化ファッション研究機構共同研究員。著書に『コバルト文庫で迎える少女小説変遷史』（彩流社、2016年）、共著に『カワイイ！少女お手紙道具のデザイン』（芸術新聞社、2015年）など。



開催概要

- 日時：2017年5月16日（火）19：00～20：30（18：30開場）
- 会場：日比谷図書文化館 地下1階 日比谷コンベンションホール（大ホール）
- 定員：200名（事前申込順、定員に達し次第締切）
- 参加費：1,000円
- 申込方法：来館（1階受付）、電話（03-3502-3340）、Eメール（college@hibiyal.jp）いずれかにて①講座名、②お名前（ふりがな）、③電話番号をご連絡ください。